

# 高等学校国語科における 映像メディアを活用した授業の開発

学籍番号：219304

氏名：加藤 正樹

主指導教員：成實 朋子

副指導教員：土山 和久

## 序章 研究の背景・目的・方法

稿者の実習校は大阪の公立工業高等学校である。本校の国語教室における学習者実態として、つぎのようなことがいえる。たとえば、小説教材を扱う「現代文 A」の学習者は、小説の内容はおおむね理解できているものの、内容の読みとりのみに注力するあまり、表現への注目の疎かになっている向きがある。それゆえ、小説教材の授業が表層的な読みにおわってしまっているのである。小説のおもしろさは、内容の読みとりのみならず、表現への注目を起点とした深層的な読みによって気づきうるものだと考える。

小説の表現への注目を起点とした深層的な読みを学習者に促すものとして、松岡礼子(2016、2019)の授業実践報告がある。松岡礼子(2016、2019)は、小説の表現、とくに〈語り〉に気づかせるために、映画の〈語り〉を媒介にしている。昨今の動画配信サービスの普及に如実のように、映画は学習者の興味・関心を喚起してやまないメディアである。その映画を国語教室に持ち込み、小説の深層的な読みの方法として活用していることは、さきの問題を解決するうえで大いに参考になると考える。

そこで、高等学校国語教科書の定番教材である芥川龍之介「羅生門」を深層的に読む試みにおいて、その映画化作品である黒澤明「羅生門」を活用することを構想した。本実践課題研究は、その構想をもとに、映画すなわち映像メディアが小説の読み深めにいかに寄与したかを検証することを目的とするものである。

本実践課題研究は、つぎの3つの手順をふんでおこなう。第一に、小説「羅生門」と映画「羅生門」とを比較分析し、後者の教材化の検討をおこなう。第二に、それをもとに構想・実践した単元の概要を述べ、学習指導の実際を記述する。第三に、学習者反応分析をふまえ、本授業実践の可能性と課題とを明らかにする。

## 第1章 国語教材としての「羅生門」

本章では、小説「羅生門」の教科書採録史を概観することを皮切りに、その教材的価値を

あらためて検討し、映画「羅生門」との比較分析をとおして、小説「羅生門」の読解指導における映画「羅生門」の教材化の可能性を明らかにした。

## 第2章 映画「羅生門」を活用した授業実践Ⅰ

「基本学校実習Ⅱ」では、小説「羅生門」と映画「羅生門」との比較分析にもとづいた授業を、第3学年(14名)を対象に実践した。本学習者は第2学年のうちに「羅生門」をすでに読んでいるが、初読時の印象を尋ねたところ、表層的な読みにとどまっているものが多数いた。そして、その表層的な読みが映画「羅生門」視聴後には深層的なものに移行しているかどうかを検証するために、批評文を書かせた。すると、その批評文のなかから、映画「羅生門」視聴時の観点を、小説「羅生門」をふたたび読むさいに応用しているものを発見した。その批評文は、映画の表現が学習者をして小説の表現に向かわせたものとして分析・考察した。映像メディアが小説の読み深めに寄与したことを検証できたと考える。

## 第3章 映画「羅生門」を活用した授業実践Ⅱ

「発展課題実習Ⅱ」では、「基本学校実習Ⅱ」で書かせた批評文の精度をさらに高めるべく構想メモを取り入れ、設定した段階項目にしたがえば批評文が書けるように工夫した。構想メモを取り入れたことにより、「基本学校実習Ⅱ」の学習者より円滑に書くことはできたが、学習者14名が構想メモの型にはまった書きかたをしたために、「基本学校実習Ⅱ」ほどのオリジナリティを期待することが逆に難しくなってしまった。ここでは、映像メディアが小説の読み深めに寄与したことを検証できなかったが、学習者14名が観点をもって対象物をとらえ、それを批評文として収斂できたことはほかならぬ成果である。

## 終章 研究の成果・課題・展望

本実践課題研究の成果としては、①映像メディアが小説の読み深めに寄与したことを検証できたこと、②映像メディアを媒介にすることで、学習者とその原テキストの表現へ立ち戻らせることができたこと、③批評文をはじめ、長い文章を書いたことのほとんどない学習者が、定められた範囲内で書ききることができたこと、の3つである。

一方、課題としては、①映画「羅生門」の教材化に再検討を加えること、②学習者の読みの多様性を充分考慮すること、の2つである。

今後は、これら成果と課題との両面を認識するとともに、本実践課題研究でおこなったことを皮切りに、映像メディアの活用を視座に据えた文学の学習指導の開発をおこなっていく所存である。